

## 特集・介護等体験

# 学生の心をたがやし、理解・認識の 推進に寄与する介護等体験

北海道函館盲学校長

鈴木 重男

### 一はじめに

本校では、「自ら学ぶ子、心をつたえる子、活動する子」の育成を目指し、アカウンタビリティの重視（子供の重視）、インフォームド・コンセントの重視（保護者の重視）、地域とともに歩む学校づくりの重視（地域の重視）の三点を経営の重点として掲げ、教育責任の明確化を図る毎時の指導計画の作成・評価や保護者の手による保護者自身の学校評価の実施、本校及び視覚障害児の理解・認識の推進を図るために地

域の教員を目指す学生の介護等体験をはじめ、地域の人々の学校訪問や授業参観などを、学校、家庭、地域の連携、推進に必要なものと位置付けて実施している。

### 二 介護等体験による学生の意識変化

先にも述べたが、「校長室情報」の図にあるとおり、二日間の介護等体験が学生の盲学校イメージの「プラス面への意識変化」に強く作用していることが分かる。

学生が、介護等体験を行うことにより、今まで抱いていた盲学校や子供たちへの「弱い」、「苦しい」、「暗い」、「悲しい」という言葉への反応から、「強い」、「楽し

このような中、二日間という短期間ではあるが、介護等体験が制度として実施されることになったことは、二一世紀を担う多数の学生と本校の子供たちとの出会いが深まるものと考え、積極的に受け入れるようにしている。

この内容を整理し、「校長室情報」を全教職員・保護者に配布した。このことにより、介護等体験の効果・成果が教職員、保護者の理解を進めるため、役立つものと考

えた。

〈図 校長室情報〉

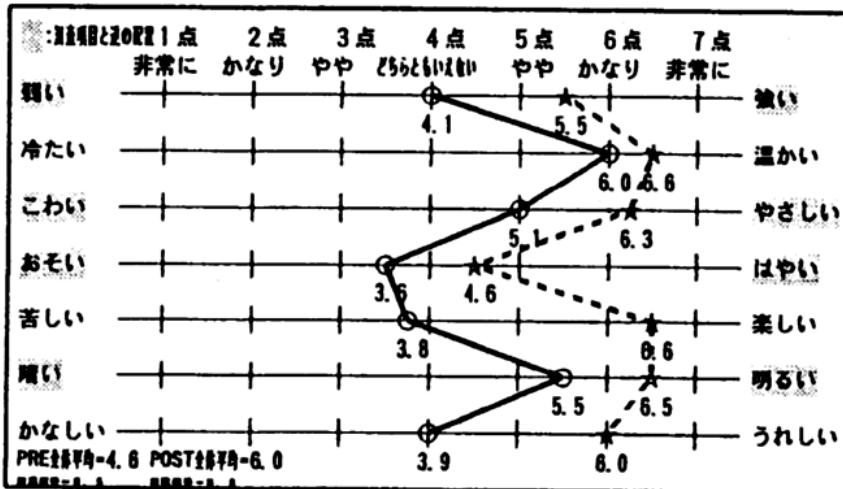
北海道函館盲学校

10.12.9  
No.50

# 校長室情報

## 函館短期大学介護等体験による盲学校イメージの変化

10.4.1施行の「教育職員免許法の特例等に関する法律」により、本校は道内の各学校にさきがけ、2期にわけ、2日間づつ、函館短期大学の学生を15名を受け入れました。そこで、本校での体験により、盲学校イメージがどう変化したのかについて、2回目に参加した8名の学生で調査しました。調査方法は、アメリカのオズグッドが考案した心理的尺度法としてのSD(セントラル・ディファレンス)法を用い、使用概念は望月(1996年)による7概念を用いました。その結果のプロフィール等は、次のようにになっています。プリテストは12/8、ポストテストは12/9の実施前後です。PRE:107.4 POST:107.4-6.6



また、同時に調べた自由記載のコメントによる比較では、次のようにあります。  
○頑張っている。 ○生徒が歩きやすい建物で明るく過ごしやすい。  
○毎日ノウハウと行きている自分が勿体ない。 ○どう接して良いか不安である。 2名  
○障害のある人は有りのままの自分でいられるよう接みたい。  
○不安で一杯です。 盲学校の人を理解したい。 ○木目の大変温かい雰囲気がある。

○盲学校って本当にこんなに明るいの? ○子どもたちに受け入れられて嬉しかった。  
○私の心が柔らかくなり、視野が広がった。 ○子どもは何でもできるし、個性があり、自分から課題に取り組んでいた。 ○純粋な子どもたちで、ものすごい力を持った学校。  
○理論で説明出来ないことがあることを今回の実習で分かった。 ○イメージを変えるためにもこの学校で多くの人たちに体験をしてもらいたい。 外の世界が汚れているのが良く分かった。 素敵な学校です。 ○子どもたちがニコニコしているのは、環境と学校の先生が素晴らしいからと考えています。 この子どもたちはまさしく天使です。

本校での2日間の体験により、盲学校イメージのPREとPOSTでの全体平均値はt検定で有意な差( $P<0.01$ )があることが確かめられました。また、平均プロフィールと自由記載のコメントからもこの体験がプラス面に作用しており、本校体験が盲学校イメージの向上や、本校及び子どもたちの理解・認識の推進に役立つことが分かりました。

こつたからと考えることができる。

同時に、本校教職員の個に応じたきめ細かな教育指導や養育指導、子どもへのかかわりの濃密さと、愛情の深さを体感することにより、特殊教育の大切さや良さが心の中にしみこんだからとも考えられる。  
このようなことから、この介護等体験は、参加した学生の心を揺さぶり、新たな側面をたがやすとともに、盲学校とそこに学ぶ子供たちの理解・認識の推進のため、大いに寄与する有意義な制度といえると思ふ。

### 三 介護等体験の概要

い、「明るい」、「うれしい」という言葉への反応が有意に強まっていることが分かる。これは、同時に自由記述してもらつた感想を比べてみても、学生の盲学校イメージの改善とともに、本校及び視覚に障害のある子供たちの理解・認識の推進につ

ながつているものと考えることができる。

これは、学生が本校の子供たちと直接触れ合うことにより、今まで抱いていた盲学校の子供たちへの偏見や差別感が払拭され、新たな視点で子供たちのことを考えたり、盲学校や子供たちの在り方や生き方を自らのものとして受け止める心の変化が起

本校では、一〇名程度を対象とした「ミュレーション体験を主としたプログラム」と、多数の学生を対象とした「学校行事等への参加を主としたプログラム」を設定している。本稿では前者について、①所

属大学の事前指導 ②介護等体験のプログラム

③学生の感想などを紹介する。

#### （一）所属大学の事前指導

所属大学における事前指導は、介護等体験の趣旨の理解と目的意識を明確化し、貴重な時間を無駄に費やすことなく、大きな成果をあげるためにも充実した内容が求められる。

昨年度から実施している函館短期大学では、栄養士資格とともに、中学校家庭科二種免許状の取得を目指す学生に対し、一年次前期の教職科目に「障害のある児童生徒の理解と指導」を加えて、「障害に基づく種々の困難」、「障害のある子供の理解」、「特殊教育のしくみ」、「特殊教育の教育活動」等について指導している。本指導は、特殊教育に造詣の深い教授が担当していることから、学生の特殊教育への関心や障害のある子供から学ぼうとする姿勢がみられ、自らそれを深めるため、講義を受けている時期などに本校に来校する学生もみられる。

この講義による指導に加え、一年次後期に実施する介護等体験の直前には、

① 記録の仕方（体験の様子、指導の内容、本日の感想）、学校の歴史・沿革、教

〈歩行体験〉



育目標、教育組織、校長・教頭・教諭等の説明、子供の障害の様子、授業の様子、寄宿舎の様子などをどのような視点で記録するか

② 本校介護等体験プログラムの内容説明と服装、持ち物等の確認と準備

③ 「函館盲学校での介護等体験を前にして」と題した作文指導

などがなされ、二日間の介護等体験が学生自ら主体的に取り組むよう、また作文指導による添削を通して、課題意識がより一層鮮明になるようご配慮願っている。

#### （二）介護等体験のプログラム

一日目は、学校全体の理解と視覚に障害のある子供たちの理解を深め

るため、説明とアイマスク使用のブレインドによる点字体験、歩行体験、シミュレーション・レンズによる体験活動等を主に設定している。

二日目は、固定した教室での授業参観や体育実技などを通した子供たちとの直接的な触れ合いと教育指導・養育指導の内容と方法の理解、子供たちが生活する環境の清掃、また懇談を通して二日間の体験を振り

区分	時間	内容	担当
第1日目	～8:25	出校	
	8:30～8:50	オリエンテーション	教務部
	9:00～9:50	学校の概要説明	校長
	10:00～11:30	シミュレーション体験	
	10:00～10:30	①ブラインドなどによる点字体験	点字指導担当
	10:30～11:00	②ブラインドによる歩行体験	歩行指導担当
	11:00～11:30	③シミュレーション・レンズによる弱視体験	養護教諭
	11:40～12:20	施設・設備見学	教頭
	12:20～13:00	給食指導体験	各所属学級担任
	13:10～13:55	授業参観	各所属学級担任・教科担任
	14:00～14:50	寄宿舎の概要説明・体験（洗濯物の整理等）	寄宿舎担当
	15:00～15:55	介護等体験の整理（感想文）等	教務部
	16:00	下校	
第2日目	～8:25	出校	
	8:30～10:45	授業参観	各所属学級担任・教科担任
	11:00～12:10	奉仕活動体験（学校敷地内清掃）	生徒指導部
	12:20～13:05	給食指導体験	各所属学級担任
	13:10～13:55	体育実技体験（フロア・バー）	体育科教諭
	14:00～14:50	懇談会（2日間の介護等体験を振り返る）	教頭
	15:00～15:50	介護等体験の整理（感想文）等	教務部
	15:50～16:00	介護等体験修了証明書の授与	校長・教頭
	16:00～	教務・宿務・事務の各室にお礼	
	16:15	下校	

### 〈体育実技体験（フロア・バレー）〉



の事前と事後の自由記述による感想を整理したものである。

この自由記述では、介護等体験を通して、実際に触れた盲学校の子供たちの明る

さや素直さ、優しさが予想を裏切るほど強烈であったこととともに、特殊教育に携わる教職員の子供たちへの教育指導や養育指導などが、子供一人一人に工夫され、確實に子供が伸びていることを子供たちのすぐ隣に座つて、自分の目で、耳で、教室内の雰囲気全体を学生の体で感じとった好ましい変化の感想が記述されている。

### 四 おわりに

昨年度実施した学生の中には、本校が本年度開催している北海道教育委員会主催の「地域ボランティアセミナー」に点訳や音

ミュレーション体験を中心としたプログラム」参照）。また、二日間を通して、学生が気持ちよく本校での生活を過ごせるよう、教職員自らが、学生に対するあいさつや言葉遣いなどに気を付けたり、控え室やお茶の準備などの接遇には特に留意している。

返り、学生自身の体験を整理したり、意義付けるための時間を設定している（表「シミュレーション体験を中心としたプログラム」参照）。また、二日間を通して、学生が気持ちよく本校での生活を過ごせるよう、教職員自らが、学生に対するあいさつや言葉遣いなどに気を付けたり、控え室やお茶の準備などの接遇には特に留意している。

このように、介護等体験が実施されたこ

とによる波及効果は、学生の人の見方、考え方、生き方や在り方というところまで深

### （三）学生の感想

図「校長室情報」の下段は、介護等体験